ATTACK 考察 LAWⅡ FAIR CATCH

“ATTACK must be our prime consideration”

RFU 発行の A Guide for Players’の「ATTITUDE TO GAME」の章に書かれている警句です。‘our’です。あなたは ATTACK を熟考したことがありますか。考えたことがないような指導者も見られませんか。警句の前に次のようなことが書かれています。

“We play to win, of course, but not at all costs”

勝つことは楽しいし勝つために一所懸命戦うわけですがただ勝つだけでは対価（注：spirit. skill. power を打ち込むこと）に値しないと説いているのです。「勝ち方の中味についての心構え」が大切だと言っているのです。練習で身体を鍛え戦略を考えると同時に ATTACK について考えることは重要かつ必要なことなのです。

他のスポーツに目を転じてみますと大相撲で身体の小さい力士が身体の大きい力士を慌てさせ転がして勝つ様は小さい工夫による力の逆転によるアンバランスが痛快感を呼ぶのです。最近亡くなりました世界最強のボクサーであったモハメド・アリは「蝶のように舞い、蜂のように刺す」という表現通りただ力まかせに相手をたたき伏せる力だけに頼る戦い方でない強さに感動するのです。トップレベルの試合をテレビで観ていると collision（衝突）と hustle（激しい突き当り）のレベルがエスカレートして止まるところが知れません。

プロプレーヤーは勝利至上主義で勿論報酬に値する体力と技能の強さと激しさを見せることを要求され観衆はそれを歓迎します。その傾向はアマチュアスポーツにも波及しプレーヤーに求められるものがエスカレートしつつあります。勝つことは楽しいことです。しかし勝つこと以外にスポーツをする楽しさはないのだろうかと考えると「明るさ」が見えてくるものです。

Rugby is a handling game.

1950 年代から 1960 年代にわたって England は第二次世界大戦後のラグビー再興を目指して研究を重ねるに当たって handling game であることを再確認することからスタートしました。ラグビーは physical contact（身体接触）を伴う running handling game であるという本質的なことから考えて進めなければなりません。physical contact を伴うプレーができるように身体を鍛えるに当たっては現在の身体の状態に少し負荷を加えることの累積が課題であって常に全員が一団となって handling を継続することが handling の上達につながる一番の早道です。継続と個々のプレーヤーの技能進歩の相乗効果を図ることが重要です。handling プレーを継続するためにボールを持って相手に捕まり倒されないということが条件になります。その負荷の一つとして個人的に走る力と共に走る技である“foot work”が物を言うことになります。side step や swerve や hand off はプレーを継続するのに役立ちます。これらの努力は体格の如何を問わず人それぞれに目標を決めて練習すれば達成でき、handling game の面白さを高め楽しさを倍増してくれるものです。チーム全体として相手に走り勝ち Backline の外側に一人余して overlap を作り出すのも基本的な handling 攻撃であることは言うまでもありません。

プレーすることとは別に一方 handling game についての Law を理解することによる自信と決心も上達に欠くことのできないものです。ラグビー発祥（1823 年）から 40 年程経た 1866 年頃 Laws の大整理が行なわれました。Admiral Sir Percy Royds の著書である“The History of the Laws Rugby Football”の記述には「In 1866 in the laws of football as played at Rugby School ･･･」と各条項に記されています。1866 年に至る間に数多くの試合が行なわれましたが規則については話し合いでほとんど解決され Law として確定し文字に記述されたのは数少ないのです。fair catch の Law はその中の一つでラグビーの handling game であるという本質に関わる重要なものです。初期の Law Ⅰ と Law Ⅱを読み進み handling への道筋に注目して下さい。

まず戦いの場所について村と村の戦いから限られた野原となりました。スポーツをより楽しくという意識があらわれています。

LAW I. PLAN OF FIELD.

In **1866** the original plan in the "Laws of Football as played at Rugby School" was right at the commencement of the booklet, in the shape of a square, with a note **"does not represent the shape, but only the arrangement."**

There was no mention of any dimensions, except for goal posts, which should **"exceed 11ft, in height and placed 18 ft. 6 ins. apart, with a cross bar 10 ft. from the ground."**

"Touch lines and goal lines cut in ; space between the goal lines called ' field of action.' " " The goal line is ' ingoal. ' "

There was no limit to ingoals and no mention of dead ball line.

Admiral Sir Percy Royds 著書 "The History of the Laws Rugby Football" より

得点即ち勝敗はどのようにしてきまったのか。
勝敗の分かれ目はゴールポストへキックしてゴールすることでした。

LAW II. GOAL.

In 1862 Blackheath had a set of Laws in which was included **"A goal must be a kick through or over and between the poles, and if touched by the hands of one of the opposite side before or whilst going through is no goal."**

LAW II. TRY.

In 1866 in "Laws of Football as played at Rugby School," it was known as **"Running in"** and read **"Running in is allowed to any player 'on his side' provided he does not take the ball off the ground or through touch. " "When the ball goes into either goal and is touched down by one of the opposite side as nearly as possible between the goal posts." "If the player runs with the ball until he gets behind his opponents' goal line and then touches down, it is called a 'Run in' ; it is lawful to ' run in ' anywhere across the goal line."**

Admiral Sir Percy Royds 著書 "The History of the Laws Rugby Football" より

それではトライは？　今日のようなトライはどのような経過をたどっていったのでしょう。

LAW II. GROUNDING THE BALL.

There was nothing in the Laws referring to this until **1931** when, owing to Irish Referees maintaining that picking up the ball from the ground in ingoal was putting one's hand on the ball on the ground, and therefore touching down, a definition was introduced for "Grounding" as follows: **"Is the act of a player touching the ball down on the ground with his hand or hands." Note. -- Picking up the ball is not grounding it."**

Admiral Sir Percy Royds 著書 "The History of the Laws Rugby Football" より

ここでボールを手で持つことのいみ即ち得点の条件としても出てきます。ボールを手で持って走るプレーは方向づけられましたが相手のインゴールにボールをつけるという条件が加わることで拾い上げる行為は地面にボールをつける行為とならず即ちボールを所有していることにならないというのです。
さて、ここで主題である handling game の原点である FAIR CATCH の Law にもどりましょう。

LAW II. FAIR CATCH.

In **1862** Blackheath had a set of Laws in which **"a fair catch is a catch direct from the foot or a knock-on from the hand of one of the opposite side; when the catcher may either run with the ball or make his mark by inserting his heel in the ground on the spot where he catches it, in which case he is entitled to a free kick."**

Also **"a catch out of touch is not a fair catch, but may be run off."**

Admiral Sir Percy Royds 著書 "The History of the Laws Rugby Football" より

そして 1866 年大整理には次のように続きます。

In **1866** in the Laws of Football as played at Rugby School it was defined :--

"Is a catch from a kick or a knock-on from the hand, but not from the arm, of the opposite side, or a throw on, when the catcher makes a mark with his heel, provided no one else on his side touch the all." The catcher could **"either drop the ball himself, or place it for another to kick, at any distance behind his mark."**

Admiral Sir Percy Royds 著書　"The History of the Laws Rugby Football"より

LAW Ⅱ FAIR CATCH はラグビーの基本プレーであるボールを手で持つことを定義づける重要なものです。問題は地上にあるボールではなく空中のボールの場合も同じくということです。いずれのプレーヤーの手中にない空中にあるボールの所有権は双方どちらにもありません。そのボールが直接 catch されたときにボールの命がよみがえって所有権が生まれ所有権を持った人が自由な選択ができることになります。LAW Ⅱ Fair Catch はラグビーが handling game であることを保証しプレーの方向づけをしたものであります。ボールを蹴り合うフットボールでボールを持って走ってもよいという発想に共感を持った人たちはその次の場面である handling を定着させるために話し合い Law として格づけすることによってラグビーの基本プレーの形と法制化の両方を作り上げたのです。ボールを手で扱って楽しむ精神はラグビーを楽しくすることに基本的な役目を果たしています。それを無視することはラグビーの identity を否定することになることを忘れてはいけません。

'ATTACK must be prime considerable'何が価値があることなのかと、そしてそれをどう考えるかという個人およびゲームの方向に向かう姿勢が問われます。Law の基本精神として equal, fair に open にそして safety という三つの concept・意志が一貫しています。Playing chart（ラグビー憲章）にもこれらのことが細かく述べられています。考えるべき事柄として次のような反省を要することばがあります。

'a rough body contact sport can easily get out of hand'プロ化が進んで collision がエスカレートし双方の接点での優劣が試合を左右するというようなことが重大なことを発見したように言われる前の話ですが自制しなければなりません。

より強い力を持つことを目指すとき先に見えてくるのがドーピングです。

攻め方の一つに有名な話があります。1991 年のイングランドで開催された World Cup で England チームが準決勝戦はタッチキックで前進しトライへと結びつけて勝った試合を「ラグビー精神に反するもの」と酷評され、優勝戦ではタッチキックによる前進策をとりませんでした。結果的に England は優勝を逃したのですが beautiful game として人々に語り継がれています。good（正しく公平）、bright(明るく賢明)、interesting（面白く発想的）、game　を追求することは大切なことです。

稲盛哲学に「利他」という思想があります。近江商人には「三方よし」という商売哲学があります。Laws book の序文に次のようなことばがあります。「プレーヤーは競技規則を遵守し、自分自身と他のプレーヤーの安全に留意することが特に重要である」

ラグビー精神は friendship を大切にする実に豊かなものです。パフォーマンスの如何はプレーヤー1 人 1 人に任されているのです。ATTACK must be our prime considerable。ラグビーは格闘技だといった片寄った考えでスタートすることなく handling でバランスを崩し合うことを楽しく競って下さい。

どうぞ拙著「Discover Rugby」または西川ラグビーコラム（http://nishikawarugbycolumn.Web.fc2.com/)をご参照下さい。

2016.08.28

西川　義行